ルカ１章 67－79 節

「ベネディクトゥス」

今日の箇所は「ザカリアの賛歌」と呼ばれています。ラテン語訳聖書の最初の一語をとって、「ベネディクトゥス」とも呼ばれます。ベネディクトゥスとは、「ほめたたえられよ」「ほむべきかな」という意味です。この賛歌は、ザカリアがエリサベトによって、後に洗礼者ヨハネを呼ばれるようになる子どもが与えられた時に、預言して歌ったものであります。 ザカリアとエリサベトは子どものいない老夫婦でありました。祭司ザカリアが、神様の前で香を焚く務めにあたることになった時。突然天使が現れて、「妻エリザベトは男の子を産む。その子をヨハネと名付けなさい。」と伝えられます。

ザカリアの賛歌は、68～75節と、76～79節の二つの部分に分けられます。まず前半は、神様への賛美、感謝の祈りであります。「ほめたたえよ、イスラエルの神である主を」（68節）。今日の箇所の直前の段落で、ザカリアに息子が生まれ、先導者として「洗礼者ヨハネ」が本当に生まれたことが書かれています。主の御言葉を信じられず、一時的に罰を受けたザカリアは、主の御計画である子どもの誕生の直後に、その罰を許され、聖霊に満たされて、今度は神様を賛美する歌を残す役目を与えられました。ここに、人間の救いの形が表されているように思います。まず、神様の御言葉を人間が信じない罪に陥ります。そして、神様の恵みである才能を制限される罰を受けます。しかし、その間も神様の御計画は着々と進み、不信の人間はその経過を黙って見ているしかできなくなります。その人は、神様の偉大さをしみじみ感じるようにされ、一方、我が身の罪深さを思い知り、悔い改めに導かれるようになります。恐らく、ザカリアもそのような体験をしたと推測することも可能ではないでしょうか。

さて後半の76～79節では、ザカリアの息子となる洗礼者ヨハネの働きについて語っています。そして、ここでも焦点はイエスさまにあるのであって、ヨハネは《主に先立って行き、その道を整え》る者であることを明らかにします。また、ヨハネやイエスさまがこれから何をしようとしているのかということの要約になっています。

私たちはクリスマスと言いますと、単純に明るく、楽しいお祭りだと考えがちですが、むしろクリスマスというのは、暗闇の中にある人を照らす、そういう喜びを告げるものであるということを、心に留めたいと思います。皆さんの中には、もしかすると、つらい思いをし、苦しい経験をして、とてもクリスマスをお祝いするような気持ちになれないという方もあるかも知れません。今年、大事な人を失った方もあるでしょう。しかしむしろそういう中でこそ、クリスマスのメッセージが届いて欲しいと思うのです。暗闇が濃ければ濃いほど、クリスマスの光は強く輝くからです。そのような思いをもって、私たちもザカリアと共に主をほめ歌いながら、クリスマスを待ち望みましょう。